



君がいたから

橘右近

6月28日。

その日は梅雨時にもかかわらず嫌味なほど晴れていた。

火葬場から天へと昇る煙を見つめ、私は一時間程前に別れを告げた人を思い出した。

もとはしまさき  
本橋 真己。

私の幼馴染みで、家族のような存在でもあった彼は、一言で言えば面倒見のいい人。言葉は少ないけど、人のことを思いやれる優しい人だ。側にいると、暖かく穏やかな気持ちにさせる雰囲気も持っていた。

享年21歳だった。

人の死というのは、多少なりともやりきれない思いが残る。その原因が事故——とかく人命救助をした挙句に失ったとあると、その思いは強くなる。

助けなければよかったのと言えるほど無情ではないし、救助された人の命が無事でよかったというだけで片付けられるほど寛大でもない。

そもそも事故が原因だと知ったのは昨日のお通夜だった。これもやりきれない要因の一つ。もし事故に遭った人達が駆けつけてくれなかったら、ずっと謎の死のままだった。

「今まで何事もなく過ごしてきた青年が、仮眠から再び起きることはなかった」とか何とか言って、奥様たちの井戸端会議のいいネタになるだけだ。

たまたま真己が一人で歩いている時に、たまたま知り合いの子供が車にぶつかりそうになり、助けた真己が転がる先にコンクリートの塀があって、運悪く頭を強く打ったということだ。

全くなんてことだろう。

真己は人の面倒をみるのは好きなくせして、自分のやったことで人の世話になることを嫌がる節があった。だから今回のことも誰にも言わなかったのだ。

それにしても、そんな大事なことがあったのなら教えてくれればよかったのに。「頭が痛いからちょっと寝る」だけじゃ、疲れてるのかな？くらいしか考えないわよ。もし事故のことを知っていたら、引きずってでも病院に行ったのに。全く、真己のバカ。

でも、真己がそういう性格で、病気という病気もしたことがないのを知っていて何の対処もしなかった私もバカだ。バカバカ。

怒りの矛先が見つからない私は、苛々し、どうしようもないことにただ頭を巡らせた。

今し方告別式から実家に帰ってきた私は、とりあえず自分の部屋に向かい手荷物をベッドの脇へ置いた。その中の一つに真己のお母さんから手渡された物があり、私はそれを手にベッドへ腰掛けた。

小さめの紙袋の中身は何かのプレゼントのようだった。

私はまだ開封する気にもなれず、くるくると色んな角度でそれを見つめる。そして軽く息を吐いて物に語りかけた。

そのプレゼントが真己からの物だからだ。

「8年も一緒にいたんだしさあ、家族同然の間柄なんだから、私にくらい言ってもいいんじゃないの？」

もちろん返事はない。私は深くため息をついた。



私、<sup>えのもと ななこ</sup>榎本 菜々子と真己は、幼馴染みということもあり、私が7歳の頃からの付き合いだった。（ちなみに真己とは同い年である。）それなのに8年しか一緒にいられなかったのは、私たちが中学二年生の頃、真己のお母さんの仕事の都合で、引っ越しをしてしまったからだ。

真己が転校する時、私は今生の別れかのように大泣きした。でも真己はにこりと笑って「またな」と言った。この時の私は、「真己はもう私と一緒にいなくても平気なんだ」とか、「冷たいんだから。もうちょっと寂しがってよ」などと一人心中で憤慨していたが、彼はこんな子供染みたことを考えていなかったのだ。

彼は、私が思ってるよりもずっと大人だった。

これは再会した後しばらく経ってから聞いたことなのだが、真己曰く、私が言ったある言葉がすごく励みになったそうで、ちっとも寂しくはなかったという。その言葉とは『ずっと味方でいる』ということ。これを言ったきっかけは、また後ほど。

当時聞かれなかったとしても、あんな子供っぽいことを考えていたなんて恥ずかしい。まあ、子供だったからしょうがないのだろうけど、それでも言わなくて本当に良かった。

真己はいつも私の先を歩いているような気がした。世間では女性の精神年齢の方が高いと言われがちだが、私たちの場合は当てはまらないと思う。第一印象こそ最悪だったものの、真己は自然と人に好かれる気質を持っていた。

第一印象……そう、真己は初対面にもかかわらず、私に向かって「ブス」などという暴言を吐いたのだ。いくら照れ隠しに言ったとはいえ、ショックは大きい。どれくらいかということ、15年近く経った今でも忘れていないくらいだ。

それはともかく。

7歳の時の私は、「父と離れて暮らす」か「新しい学校で頑張るか」の選択に迫られていた。つまり、父の転勤で引越すかどうかを決めようとしていたのだ。

父と離れて暮らすよりかは、まだ一年しか通ってない学校を切り捨てることを選んだ私だったが、それでも緊張はかなりのものだった。そこへ隣家となった真己のあの発言である。私は登校初日にして、早くも挫折してしまった。

始業式の時間が刻々と迫るにつれて、私の抗議の声も大きくなっていった。母にしがみついた私は、涙ながらに学校へは行きたくないと訴えたのである。当日になって突然反発した娘に、両親は困惑の色を隠せない。なんとかなだめようとするが、全部無駄に終わっていた。

そんな時、家のチャイムが鳴った。

こんな朝早く一体誰だろう？と、疑問を抱いた声色で母はインターホンに出た。

「隣の<sup>みやげ</sup>三宅です。えっと、菜々子ちゃんを迎えに来ました」

幼さを感じる話し方に、母は弾むような声で返事をし、ランドセルを片手に私を玄関まで連れ出した。諸悪の根源には会いたくないのに。しかし私の気持ちなどおかまいなしに、二度目の対面を強いられる。

「いってらっしゃい」と明るく送り出す母とは裏腹に、私は不機嫌な顔をして歩き出した。そんな私に真己は躊躇いがちに声をかける。

「昨日、ごめん。本当はあんなこと思ってないから」

謝ってくるなど予想もしていなかった私は、一瞬驚いたものの、口ではもう気にしていないと答えていた。もしかしたら、そんなに悪い奴じゃないかも。

真己は私の許しが得られるやいなや、ぱっと笑顔を咲かせた。

「何かわからないことがあったら俺に聞けよ。力になるから」

本当に悪い人じゃないかも。

我ながら単純である。

それから真己は本当によくしてくれた。私が学校に慣れるまでは——といっても、実際は卒業まで一緒に登校してくれたり、何か困ったことがあったら助けてくれたり、遊び仲間に加えてくれたりもした。

私にとってスーパーマン的な存在である真己でも、かわいらしい失敗はいくつかある。その中で、今思い出しても、ぷっと吹き出してしまいそうなことが一つ。あれは、小学校四年生の時だった。

当時女子の間で「幸福を呼ぶ四つ葉のクローバー」が流行っており、それに便乗していた私は、友達と二人で近くの土手で搜索を始めた。何時間、何日と、よくもまあ飽きもせずに探したものだ。

搜索開始から三日が過ぎても、結局私は見つけられなかった。友達は二日目辺りで幸福を手にしていたのに。

意地も加わり、どうしてもその日中に見つけたかった私は、友達が帰ろうと言っても聞き入れなかった。痺れを切らした友人は先に帰り、西日がもう沈みかけていた頃、半泣き状態だった私に声かけられた。

「菜々子ー？何してるんだー？」

真己だった。

私は事情を説明し、家に帰らない理由を伝えた。真己は暗くて見えないだろうにと半ば呆れていたが、私に付き合っ  
て四つ葉のクローバー探しをしている。

三日間も探し続けた私が見つけられないのだから、真己に見つけられるわけがないと、たかをくくっていたのがまずかった。私は重要なことを真己に伝えるのを忘れていた。

「四つ葉のクローバーは自分が見つけなければならない」そんな決まり事があったのだ。

私の苦労は、真己の喜びの声で無残にも泡となってしまった。

「どうして真己が先に見つけちゃうのよ！真己のバカ！こんなのいらない！」

悔しさから私は真己に八つ当たりを始める。これには真己もむっとした様子を見せるが、特に怒鳴ったりはせず理由を聞いてきた。

「これはね、自分で見つけなきゃ駄目なの！それは真己が見つけたんだから、真己のものなの。私は自分で見つけるからいい」

そして再びしゃがみ込む私。真己は一つ息を吐いて私の手をとった。

「遅いから今日は帰ろう。おじさんもおばさんも心配してるよ」

「真己のせいなんだからあ。もうちょっとで見つかったのにー」

「悪かったよ、ごめんな」

「もー、バカバカ。謝ってすむ問題じゃない」

「はいはい」

引っ込みがつかなくなっている私に気付いているのか、真己は私の八つ当たりも軽く流し、他愛ない会話へと変えてくれる。いつもそうだった。

しかし、真己のお人好しはこれで終わらない。

次の日のお昼休み。校庭に遊びに行く子もいれば、室内で何かをして楽しんでいる子もいる。

私はどちらかという校庭派だが、この日は友達と「クローバー談議」をしていた。クラスでもちらほら、四つ葉の

クローバーを持ってる子がいると言う噂があがったからだ。羨ましい気持ちとやる気が混ざり、今日も頑張って探すぞ！と決意を固めていると、クラスの何人かが私の名を呼んだ。

「榎本さん、呼んでるよ」

見ると真己がドアの付近で手招きしている。私は不思議に思いながらも駆け足で真己の元に向かった。

子供特有なのか、抜け道や秘密の場所といった大人が気付かないようなひっそりとした所を熟知している。真己も例外ではなく、昼休み最も人が少ない場所へ行き、本題へ入った。

真己はごそごそとお尻のポケットを探りながら話をする。

「これ、俺が持っても仕方ないし、俺の幸せを半分分けるってことでいいだろ？」

最後の言葉と重なるように差し出された手の中には、昨日真己が見つけた四つ葉のクローバーがあった。

違うところは、長時間放ったらかしにしていたからか、はたまたポケットに入れていたからか、元の姿を思い出せない程しおれていたという点。

「これ……」

クローバーの姿にというよりは、真己の行動に意表を突かれた私が一言呟くと、手の中の惨状に気付いた真己は、勢い良く手を引き戻した。

「あ、や、やっぱり今のなし！」

顔も耳も真っ赤になっている。

「今日、もっとちゃんとしたのに替えてくるから！」

「あ！真己！」

そして脱兎の如く走り去る真己に声をかけるも既に遅く、ものの数秒で姿を消した。

私は話の展開についていけず、しばらくぼかーんと立ち尽くしていた。

だがこれで本当にその日クローバー探しにいったのだからすごい。真己のお人好しは筋金入りなのである。

四つ葉のクローバーは結局どうだったのかというと、見つからなかった。やはり人生そううまくはいかない。真己なんて私よりもしょげてしまった。

でも、代わりにご利益がありそうな葉を手に入れた。なんてことはない、真己が見つけたあのしおれたクローバーを押し花にしたのだ。ちょっと不格好になってしまったけど、真己があんなに喜んでくれたし、私は大満足である。

「菜々子」

不意に名前を呼ばれて、私はびくりとして顔を上げた。

「何だ。お父さんか」

もう、私を「菜々子」と呼ぶ男性は父しかいないというのに、何を期待しているんだろう。

「どうしたの？」

「お茶淹れたから、一緒に飲もう」

「うん。わかった」

私は弱々しく笑い、プレゼントを持ったままリビングへと向かう。

テーブルには淹れたてであることがわかるように湯気が揺れていた。一緒に帰ってきたはずの母の姿はない。

「お母さんは？」

「今日はおりえ織江さんの手伝いをすると行って、さっき出て行ったよ」

織江さんというのは真己のお母さんのことだ。

私は深く追求せずに、定位置となっている椅子に腰掛けた。

軽く息を吹きかけお茶を口に含む——が、泥を飲んだのかと思うような喉ごしに思わず吐き出しそうになった。心配そうな様子を見せる父に「むせただけ」と言ったが、もう一口飲む気にはなれなかった。

そういえばと、火葬場で出たお寿司も似たような感じだったのを思い出す。

普段なら喜んで食べるトロも、まるで石を飲み込んでいるかのように味も素っ気もなく、一カ  
ン食べるのがやっとだった。

「しばらくはおいしい食事が出来ないかもしれないね」

ふと父がそんなことを漏らす。

「真己くんと一緒にする食事はおいしかったなあ」

「……うん」

不意に胸がつまった。

そうだ。もう二度と真己と一緒にご飯を食べることは出来ないんだ。

再会してからも度々家に招いていたが、この交流は小学五年生の頃からあった。その時期は真己の両親が離婚をした時でもある。

離婚の原因は、噂ばかりが先立って本当のところはわからないが、そもそも他人の家庭の事情なんて詮索するものではない。事實は、離婚によっておばさんが夜働くことになり、真己は夕飯を一人ぼっちで食べなくてはならなくなったということだ。

真己はだんだんと元気のない日が多くなった。口数が少なくなったと感じるのも気のせいではない。

何とか真己に喜んでもらおうと両親に相談したのが、一緒に食事をするということだった。試しに一度でもいいからの提案が、我ながら実にいい結果となった。

最初からそこにいた感じとでも言おうか、ずっと家族でいるような感覚にさせられた。違和感を全然抱かなかったのである。それからは親同士が話し合いをし、夕飯を共に食べることとなった。

真己と父は何故かとても気が合い、スポーツや雑学、父の子供の時の遊びやらで話題は尽きなかった。真己の尊敬する人がうちの父というのだから、その信頼は厚い。

私にとってちんぷんかんぷんな話題だとしても、真己と父が楽しそうに話しているのを見て、私も楽しかった。単純に、真己と一緒にご飯を食べるのが嬉しくてたまらなかったのだ。

しかし、周りはそう見なかったようだ。近所では「しびしび面倒をみている」とか、「迷惑なことだ」などと中傷がされ、学校でもある問題が起こった。

人の口に戸は立てられぬというように、私たちは気にしないことにしていたが、ある日いきっかけがあった。

登校する時に、ちょうど噂好きのおばさまたちが、私たちの存在に気付くことなく話をしていたのだ。

私はそのおばさんたちに向かって、いきなり元気良く——というよりは大声で挨拶をした。すると飛び上がったおばさんたちは、一応口々に挨拶を返すものの、蜘蛛の子を散らすようにして家の中へと入っていった。してやっつかりの笑顔を向けると、真己も吹き出してたっけ。

それからはあまり噂を耳にしなくなり、ワイドショーの芸能人ニュースが賑わうと、ついにはぱたりと途絶えていた。

次は学校である。

真己の性格上、大勢で群がるよりも一匹狼でいる方が多かったので、真己を良く思っていない連中が、ここぞとばかりにねちねちと攻撃をしかけてきた。攻撃といっても、真己に力勝負で勝てないことを知っているため言葉の方で、だったが。とにかく真己のお母さんのことや一緒にご

飯を食べることに関して、とやかく言ってくるのだ。

「おい本橋。お前、榎本んちで飯食ってるんだって？よく恥ずかしくないよなー」といった具合である。

休み時間は遊ぶことに夢中になるので、こういったことは掃除の時間に起こる。ちゃんと掃除をするようにと、何度も注意したところで聞く耳を持たない。いい加減うんざりする。

「お前の母ちゃん、水商売ってやつやってんだろ？うちの母ちゃんが言ってたぜ、そういう商売するのは、ろくでもない奴が多いって」

「何だと？」

「ちょっと！真己のお母さんのこと悪く言わないでよ！」

これにはさすがの真己も怒りの表情を見せ、私もついに口を出した。真己をからかっていた数人の男子は、一斉に注目を浴びたということもあり少したじろいだ様子を見せたが、すぐに向き直り吠え立てる。

「だから子供も非行に走るんだってさ」

ぎゅっと、ほうきを持つ手に力が入った。

「バッカじゃないの！真己が非行なんて走るわけないでしょ？それに、お婆さんは素敵な人よ。優しくて綺麗だし、何より気が利く人じゃないと商売なんて出来ないんだから」

口では負けない自信があった私は、ぷいとそっぽを向く。言い返せなくてさぞや悔しいだろうと思いきや、そういった連中は負け犬の遠吠えをするものだということを忘れていた。

「うるせー、女は黙ってる！」

ぶち。どこかで堪忍袋の緒が切れる音がした。

私は持っていたほうきを大きく振り上げ、今の今まで喚いていた男子のお尻に向かって思い切り振り下ろした。

バンツという鈍い音と共に埃が周囲に巻き上がる。

ごほごほとあちこちで聞こえる咳をバックに、私は毅然とした態度で話しかけた。

「そういうの、偏見っていうのよ。偏見を持っている人こそ、ろくな大人になれないわ。でも真己は違う。偏見なんてもってないし、色んなこと知ってて頼もしいんだから。それに、真己と一緒に食べるご飯はとってもおいしくて楽しいのよ。おいしくご飯を食べてるだけなのに、何で文句を言われなくちゃならないの？あんたたちと一緒に食べるご飯はさぞかしまずいんでしょ

うね！」

私がこんな<sup>たんか</sup>啖呵を切れたのも、それだけ真己との食事が楽しかったということだ。だから真己の転校まで続いたのだし、真己がいなくなった後は何か物足りない気がした。

そういえば、転校の時に励みになったという例の言葉は、この啖呵を切った後に言ったと記憶している。まあ話を戻して。

真己は少しでも私たちと一緒に食べるご飯をおいしいと感じてくださるだろうか？父は、私たちが楽しいと感じているのだから真己も同じ気持ちだと言っていたが。一緒にいることが当たり前で、意識することなどなかったのだが……私たちの関係って、一体何なんだろう？

一度、真己との再会後に、父が「真己くんが相手だったら父さんは安心だ」と言っていたことがあった。そんなことを考えてもいなかった私は、動揺するばかりでうまく処理が出来なかったが、周りから見たら付き合っているように見えたのだろうか？

確かに真己は優しい。でも、ここで思い出して欲しいのだ。真己は根っからのお人好しであることを。

異性の話が中心になるお年頃の中学生時代だって、真己は密かに女子の間で人気があった。誰に対しても優しく接するので、私への行動も特に意味はないのだと思っていた。

再会のきっかけとなった一年前の夏も、ナンパされて困っていたのがたまたま私だったというだけで、真己だったら違う人でも助けているはずだ。

でも、あの時は本当に嬉しかったなあ。ナンパから助けてもらったのもそうだけど、それ以上に真己に会えたのが嬉しかった。何せ、転校してから一度も連絡をとっていなかったから。

私は、順調に行けば大学卒業を二年後に控えていた春に、両親への懸命の説得で一人暮らしを始めることにした。すぐ中途半端な時期だとは思ったが、大学までの道のりが遠く、後三年近くも我慢することは嫌だったのだ。決して両親が嫌になった訳ではないと強く主張したら、最低でも月に一回は実家に帰ることを条件に許してもらえた。

その日は無性にコンビニ限定のデザートが食べたくなり、22時を回っていたのにもかかわらず、着の身着のまま歩いて5分のコンビニへ行った。

50mくらい先にコンビニの明かりが見えた頃、ナンパをされた。歩道側に車を寄せつつ、ターゲットの女性の歩調に合わせて車を進ませる、いわゆるナンパ車である。

ウィンドウが開き、中からいかにもスケベそうな男が、いやらしい笑みを浮かべて私に声をかける。

「ねえねえ、一人？それなら、ちょっと俺達と話でもしよーよ」

私は露骨に迷惑そうな顔をして早歩きで向かう。しかし、相手は車なので速度調整は簡単だ。

男は返事のこない質問を2、3繰り返し、とうとう車の中に引っ込んだ。

あー、よかった。と思ったのも束の間、10mくらい先で車を止め、助手席に座っていた——声をかけてきた男が降りてきたのだ。

予想外の展開に、はっと足を止める私。ちょっとしつこい？この人たち。じゃなくて、こういう時どうすればいいんだっけ？逃げる？どこに？コンビニは男の後ろだ。

少々パニック状態の私は、色々と考えるが足を震えさせるだけで何も出来なかった。絶対話だけで終わるはずないもの。その後のことは想像もしたくなかったので、考えを断ち切った。

どうしよう……怖い！後は何も考えられなくなった。

一歩後ろへ足を引いた。とにかく車が入れない所からアパートへ帰ろう。もうそれしかない。

「おいおい、逃げんなよ」

くると踵を返すと、突然白い壁が出来た。そして私は避けきれずにその壁へ顔を埋める。……この温かさは、人間だ

！

「ご、ごめんなさい」

慌てて謝るが、彼は「いや、俺の方こそ」と言ったきり口をつぐみ、私を見つめた。そして視線を私の背後へと移し、一歩前に出る。

「何？何か用？」

降りてきた助手席の男に向かって男性はそう言い放つ。すると、明らかな動揺を見せながらナンパ男はそそくさと車内へ戻った。意外にもあっさり引き下がった男達は、排気音を鳴らして夜の街へと消えていった。

「あの、ありがとうございました！」

私は恐怖と、ある期待に高鳴った鼓動を隠すように深々と頭を下げる。もしかして、もしかしてなんだけど。

「無事でよかったな」

聞き覚えのある声に私は勢い良く顔を上げ、救世主を凝視する。やっぱり……真己だ！

喜びと驚きで、この時の私は余程すごい顔をしていたのだろうか、今度は真己が眉をひそめながら私を見つめた。そして数秒後、驚いた表情を浮かべて問いかけた。

「あれ……？菜々子？」

そうそうそう！私は返事の代わりに何度も頷く。

「あはは。変わってないなー」

真己こそ、その笑顔全然変わってない。子供みたいににこーって笑うの。怒られるから本人には言えないけど。

それから少しその場でお互いの近況などを話し、今の目的地が同じことから共にコンビニへ足を運んだ。

真己は高校を卒業してすぐに調理師の免許を取り、お母さんのお店を手伝っているそうだ。いずれはあとを継ぐ気でいるらしい。

コンビニへ寄ったのは、うっかり切らしてしまった食器用洗剤を買うためだと言っていた。お互いの買い物も終わり、久しぶりの再会に気分が高揚していたこともあって、おつかいの帰りだということをすっかり忘れていた私は、これから部屋へ遊びに来ないかと誘っていた。

真己はちょっと考える仕草をとって、「少しなら」とOKを出す。私はまるで子供のように歓喜の声を上げ、スキップする気持ちで歩き出した。

アパートに着くまではおばさんのお店の話になった。引っ越す前に勤めていたホステス業ではなく、居酒屋風の小料理屋を営んでいるそうだ。お店の名前は「凛<sup>りん</sup>」。場所はアパートから10分以内にあるそうだが、住所を聞いてもわからなかったのが、明日連れて行ってもらうことになった。

「あ、ここなの、私の部屋。ちょっと待っててね」

鍵を探す私に、真己は歯切れ悪く口を開く。

「あー……悪い菜々子。やっぱり帰るよ」

「え！何で？」

何か気に障ることもしたかな？突然のお詫びに声<sup>うわ</sup>が上<sup>あ</sup>ずった。

「店忙しいの忘れてた。また今度にするよ」

そうだった！お店の買出しに、真己は来てたんじゃない。

「ごめんね、私そそっかしくて。今度、絶対来てね！」

「ああ。じゃあな」

手を振って一時の別れを告げると、私は真己の背中を見送った。

階段前で真己が早く部屋に入るようにと合図していたので、一旦部屋に入る振りをして様子を伺った。私は帰る人を見送るのが好きなのだ。真己が階段を下り始めたことを確認すると、手すりにのっかるようにして出てくるのを待つ。振り返るかな？そのまま行っちゃうかな？と考えるのもまた一興。

真己は……振り返った。少々呆れた顔をしていたけど、手を上げてくれたのだから、そんなに気分を書してはないだろう。

「う、寒い」

姿が見えなくなっても、しばらく真己のいた場所を眺めていたせいだ。初夏なので、夜は半袖では寒いくらいだった。腕をさすって、部屋を出たときとは違う格好だったのを思い出した。半袖のTシャツを着て出たはずなのに長袖のシャツを羽織っている。真己が気遣って自分の着ていたシャツを貸してくれたのだ。

そっと袖の匂いを嗅いでみた。これが真己の匂いなんだぁ……はっと我に返った私は、自分が今したことに急に恥ずかしさを感じ、慌てて部屋の中に入った。

たった数十分だったのに、色々あったなぁ。

近所迷惑かと思いつつ洗濯を始めた私は、明日の楽しみと昔の懐かしさの両方を感じていた。

小料理屋「凜」は本当に近所にあった。込み合った商店街の中のお店くらいの広さだが、狭くは感じない。きっとおばさんのセンスがいいのだろう。

予め真己から話が出ていたようで、おばさんは驚くことなく快く迎え入れてくれた。まだ夕方ということもあるのか、お客さんの姿はない。私は軽く挨拶をして、昨日両親から聞き出した手土産を渡した。ちなみに真己のシャツは会ったときに返している。

「菜々子ちゃん、今日はゆっくりしてってね」

「はい。ありがとうございます」

おばさんは真己に今日は店を休むように言っていたので、私は普段の真己の様子が見たいとお願いしてみた。気を使ったわけでも何でもなく、本心だった。

実際そう言って、おばさんは助かったようだ。失礼なことかもしれないが、私が思っていた以上に繁盛していたからだ。真己とおばさんの他に、もう一人バイトの男の子がいるのだが、それでも目の回るような忙しさである。

カウンターの端で今まで黙って見ていたけど、食事も終わったし、どうもじっとしてられない。これでも食事を頂いたらお礼をするという義理堅い面があるのだ。

私はそっとカウンター内（いわゆる厨房）にいる真己に声をかけた。

「ねえ、何か手伝うことない？」

「え？いいよ。菜々子はお客さんなんだから」

「そんなこと言わずに。手伝いたいだよ。真己だって家でご飯食べたらお手伝いしたじゃない」

「子供が出来る範囲だったよ」

「も一、変に謙遜しないでよ。私、高校の時に飲食店でバイトしたことあるから、ちょっとは役に立てると思うよ？」

なかなかいい返事をくれない真己に、おばさんの一押し。

「菜々子ちゃんが手伝ってくれるなら助かるわー。今日は特に混んでるから」

真己はしぶしぶ承諾した。

おばさんからエプロンを借りて、料理を運んだりテーブルの片付けなど、レジ以外のことを担当した。食器洗いでもよかったのだが、あまりさせてはもらえなかった。華は見える所（カウンターの外）へということらしい。それは冗談で、手を荒らしてはいけないと気を使ってくれたんだらう。

手伝い開始から二時間くらいでお客さんの足は減った。お店兼住家なので、きっちり午後11時半には閉店することを常連さんも把握しているそうだ。

それでも半分以上は席が埋まっていたが、三人いれば余裕だというので私のお手伝いはここで終了。

「お疲れさん。送っていくから、ちょっと待っててな。飲み物、来た時に座ってたところに用意してあるから」

「ありがとう」

エプロンをたたみ、手荷物を持ってカウンター席に腰を落とした。真己の言っていた通り何やら飲み物が用意されている。クリーム色の無炭酸のようだ。炭酸が飲めないことを覚えていてくれたんだと、くすぐったい笑いがこみ上がる。

「あ！バナナミルク！おいし〜い！」

一口飲んで感激の声を上げる私に、着替え終わった真己が笑みを浮かべて顔を出す。メニューにないってことは、わざわざ作ってくれたのだろうか？それにしてもどうして私の好きな飲み物を知っていたのだろうか？

「昔から、何か飲むかって聞かれたらバナナミルクって答えてただろ？だから」

不思議そうな顔の私に気付き、そう説明する真己。自分でも気付かなかった癖を知っていたなんて、ちょっと（いやかなり）嬉しい。

「好みが変わってなくてよかった」

お礼と感動した旨を伝えると、真己は照れくさそうに笑った。

「あ、菜々子ちゃん。ちょっと相談があるんだけど、いいかしら？」

そろそろ帰ろうかとした時、おばさんが遠慮がちに言った。何ですかと尋ねると、私にはある意味嬉しいことを提案される。

それは、来月からいなくなってしまうバイトの子の代わりになってくれないかということだった。アパート生活にも慣れてきたし、そろそろバイトでも始めようかと考えていたのでちょうどいい。何より真己と会える日が増えるのだ。せっかく再会したのに、なかなか会えずに疎遠になってしまったなんて結果は嫌。

真己がおばさんに抗議をしているようだったが、私は二つ返事でそれを承諾した。

それから週四日のバイト、加えて大学のある日の夜ご飯をご馳走になることになり、結局ほぼ

毎日顔を合わせるようになった。昔の恩返しだと言っていたけど、私はおばさんが両親に食費を渡していたのを知っている。うちの親も親で、それを真己の貯金としていたけど。最後はどっちつかずで両親が預かっていたと思ったが、親同士のことなのでよくわからない。

話を戻そう。バイトがある日と夕飯をご馳走になる日は、必ず部屋まで送ってくれた。ご飯を頂く日に仕事が抜けられない状態だと、私はしばらく待つことになる。一度レポートを書くために真己の部屋を借りたことがあったのだが、それがきっかけとなり段々と私の勉強道具が真己の机を占領していった。

近くだから大丈夫だと言っても、真己は頑として譲らなかった。確かに過去、目の前でナンパ事件があったので信憑性には欠ける。

もしかしてと思い出したことだが、あのナンパの日の帰りも、真己は私を送るために誘いにのったのではないだろうか？買出しの品を手にして、店が忙しいことを忘れるとは思えない。

「真己くんの優しさは誰にでも向けられるけれど、菜々子だけに向けられた優しさがきっとあるはずだ」

ふと、父の言葉が頭に浮かぶ。私が気づいていないだけで、父さんにはわかるものがあるのだと。だから父さんは「真己だったら安心だ」と言ったのだ。

私だけに向けられた優しさがあるとしたら、それは一体何なのだろう？

毎回部屋まで送ってくれたのも、ナンパ事件の時に見せたようなさりげない気遣いや、好きな飲み物を覚えていてくれたのも、全部私だけに向けられた優しさだとしたら、一体何だというのだろう。

そんな風に考えていくと、全てがそう思えてくるし、単なる自惚れにも見えてくる。

そう、例えばこんなことがあった。

真己が店を継ごうと決心した理由は、「好きだから」らしい。酔っ払ったオヤジが多くても、仕込み作業がきつくても好きなのだと。

「疲れた顔して入ってきたオヤジさんたちが、料理食べて酒飲んで、たまに愚痴言ったりしてさ、それでも最後は元気になって帰る姿見たら、俺も頑張ろうって気になるんだ。自分の作ったもので喜んでもらえるのは、やっぱり嬉しいもんな」

本当に嬉しそうに語る真己の顔を見て、共感した私は大きく頷く。

「わかるなあ、それ。何かさ、お互いに分け与えてる部分があると思うんだよね。私たちはおいしい食事で、お客さんは感謝の気持ちっていうのかな。暖かい気持ちを伝え合ってるって気がする」

「お、話がわかるね、菜々子さん。どう？俺とずっと一緒にこの店を切り盛りしていかないか？」

「クビにされない限り、喜んで」

冗談ぽく言っていたし、この後は談笑して終わってしまった会話だ。

最後の言葉は、受け取りようによっては告白にも聞こえる。でも私は、ただ意気投合した二人の会話にしか聞こえなかった。

ここではたと気付いたことが一つ。私は、真己のことをどう思っていたのだろうか？一緒にいるのは楽しいし、ただの幼馴染みよりかはうんと大切な存在だ。でも……

「ねえ、お父さん。一緒にいるのが当たり前だと思うからって、恋愛の好きとは言えないよね？」

突然の質問にも、父は嫌な顔一つせず考えてくれた。私がどういう意味で尋ねているかを知っておいた方がいいと判断した父に、素直にありのままの気持ちを伝える。

「菜々子は真己くんが好きかい？」

「だから、好きは好きでも恋愛の好きかって聞かれるとわからないって……」

「別に恋愛の好きかどうかと分ける必要はないんじゃないかな？好きにも色々形があっていいと思う。友達の好き、家族の好き、恋愛の好き……でもそれらは、全部好きという感情だ。好きなものは好き、それでいいじゃないか。父さんだって、母さんも菜々子も真己くんも皆好きだよ」

皆好きという感情……何だか心に引っかかった。

「いいかい？菜々子。一緒にいて楽しい、安心するといったことはとてもいい関係だ。いい関係にあると、人は相手のことを思いやったり、喜ばせようとしたり、幸せを願ったりする。それがね、人を愛するということだ」

「……じゃあ、私だけに向けられた優しさっていうのも？」

だんだんと鼓動が高鳴っているのがわかった。少しずつ見えてきた答えに、なぜか緊張する。

「それは、真己くんから？」

父が指したのは、真己からのプレゼントだった。

私は生返事のまま袋から小さい封筒と箱型のプレゼントを取り出し、先に包装をはがした。そこに、求めている答えがずばり書かれているような気がしたのだ。

白い、長方形の箱はジュエリーを包む時には定番の物だった。中にはもう一つのケースが入っている。

震える手でそっとケースを開けると、四つ葉のクローバーをモチーフにしたネックレスが姿を見せた。

四つ葉のクローバー？

そのプレゼントの意味がわからず、小さい封筒を開ける。どうやらメッセージカードのようだ。

【ハッピーバースデー、菜々子。幸せにな】

カードには、そう書かれていた。そして追伸。

【やっと子供の頃の約束が果たせてよかった】

子供の頃の約束？そして四葉のクローバー。

でもあの時は葉にして終わったんじゃ……しばらく記憶を辿っていくと、ある真己の言葉が思い出された。

「菜々子の幸せのために、いつかちゃんとした四つ葉のクローバーをプレゼントするよ」

愕然とした。

まさか、あの時のことを覚えていたなんて。ずっと昔にした、私でさえも忘れていた小さな約束を。

「ふっ、う……うう」

急に涙が溢れ出た。次々と零れる涙を、カードを持ったままの手で拭う。むせ返るように溢れる感情をもはや止めることは出来なかった。

私だけに向けられた優しさも、喜ばせようとしてくれたことも、幸せを願ってくれたことも全部そうなのだ。

そっと父に肩を抱かれ、耐え切れずに私は声を上げて泣いた。

「これ、小学生の時に約束したの。真己が幸福のクローバー潰しちゃったからって。真己のせいじゃないのに、先に見つけたこと悪いと思って、それで……」

後は何を言っているのか自分でもわからなかった。子供のように泣きじゃくる私の背中を、父は何も言わず優しく撫でてくれた。

私は真己に愛されていた。こんなにも、愛されていたんだ。

気が付かなくてごめんなさい。もっと愛せば良かった。もっと早くに気付けばよかった。

今じゃ遅い。今じゃもう——真己はいないんだから。

——…

突然目眩と共にどこかへ落ちていく感覚がした。自分だけ空間が切り離されたような孤独と恐怖。真っ暗闇に裸同然で放り投げられ、ただただ不安を抱くだけの、そんな感覚。

この感覚は…あの時と同じだ。お骨を納めようとした、あの時と。

真己は背が高い方だったから、あんな壺に納まるわけない。

きっとあの骨は真己じゃないんだ。

そんなことを思ったあの時と。

だとしたら一体誰のなんだとか、一緒に見届けた棺は何だったのかとか、色んな矛盾を無視して出てきた考えに自分を納得させ、いざ箸を持った時だった。

カタカタと端からも見てわかるように、私は震えていた。

うっすらと笑みを浮かべながら…。

頭では真己じゃないと信じ込んでいるのに、骨を納めるという行動が死を認識させる。

やりたくない。

大丈夫、真己じゃない。

そんな葛藤が震えとなって表れたのだ。

カタカタカタカタ…。

震えが止まらない。

真己がないなんて実感は、これっぽっちもわからないのに。

ううん。これからもわかなくてもいい。そう思ってるのに。

怖かった。

怖くてたまらなかった。

またもゾクッと、強く体が震える。決して河原から吹く風の冷たさのせいではない。

私は誘われるように家を出て、思い出の河原にやってきていた。今はすっかり辺りが闇に包まれている。

「あ…」

シャララと音を立ててネックレスが手の中から零れ落ちた。慌ててしゃがみ込み、落ちた辺りを手探しする。

「菜々子、何してるんだ？」

頭の中で真己の声がこだまする。

「う…う」

嗚咽が零れる。

「お、あったぞ」

固い四つ葉のクローバーが指先に触れた。

それをぎゅっと握りしめる。

「俺の幸せを半分分けるってことでいいだろ」

全然よくない。

半分くれるんでしょ？だったら、いなくならないでよ。

側にいてよ。

幸せにしてよ。

また菜々子って呼んでよ――

何かに祈るように、何かにすがるように、私はネックレスを握りしめていた。  
爪が手のひらに突き刺さり、じんじんとする。  
その痛みが妙に堪えて、真己を呼んだ。

返事は、ない。

これからも、私が真己を呼んで返事がくることは、ない。

「ごめんね、真己」

そして、きっと名前を呼ばれて幸せを感じることも、ない。

だって、もう恋はしない。

漠然と、そう思った――

E N D

## 君がいたから

<http://p.booklog.jp/book/113033>

著者：橘右近

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ucon-novel/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113033>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト